〔古今和歌集四秋〕人のもとにまかれりける夜、きり〳〵すなきけるをきゝてよめる、

藤原たゞふさ

蛬いたくなきそ秋の夜のながき思ひは我ぞまされる

〔古今和歌集十九誹諧歌〕寛平御時、きさいの宮の歌合のうた、

在原むねやな

秋風にほころびぬらし藤袴つゞりさせてふきり〳〵す鳴

〔後拾遺和歌集四秋〕だいしらず

そねのよしたゞ

なけやなけよもぎが杣のきり〳〵す過行秋はげにぞかなしき

〔藤原基俊家集上〕むしのうらみ、こひによす、

ゆかちかしあなかま夜はのきり〳〵す夢にも人のみえもこそすれ

〔古今著聞集五和歌〕花園左大臣家に始て參りたりける侍の、名簿のはしがきに、能は歌よみと書たりけり、おとゞ、秋のはじめに、南殿に出て、はたをりのなくを愛して、おはしましけるに、暮ければ、下格子に人まいれと仰られけるに、藏人五位たがひて、人も候はぬと申て、此侍參たるに、たゞさらば汝おろせと仰られければ、參りたるに、汝は歌讀など有ければ、かしこまりて、御格子おろしさして候に、此はたをりをばきくや、一首つかうまつれと仰られければ、あをやぎのと、はじめの句を申し出したるを、さぶらひける女房達、折にあはずと思ひたりげにて、わらひ出したりければ、物を聞はてずして、わらふやうあると仰られて、とくつかうまつれとありければ、

あをやぎのみどりの糸をくりおきて夏へて秋ははたをりぞなく、とよみたりければ、おとゞ感じ給て、萩おりたる御ひたゝれ、おし出して給はせけり、

つらゆき

〔拾遺和歌集三秋〕屏風に

秋くればはたおりむしのあるなべにからにしきにもみゆる野べ哉